

第三八回国際アルタイ学会

岡田 英弘

常設国際アルタイ学会 (Permanent International Altaistic Conference、通称PIAC) の第三十八回会議は、岡田英弘 (東京外国語大学名誉教授) を会長 (President) として、一九九五年八月七日 (月) から十二日 (土) まで、三菱信託銀行川崎研修所 (神奈川県川崎市川崎区藤崎三丁目六番一号) で開催された。この学会の日本開催は、今回が初めてである。

PIACが創立されたのは一九五八年のことである。この前年、ソ連でフルシチョフ党第一書記が東西平和共存を呼びかけ、デタントが始まっていた。この機運に乗じて、当時大部分が共産圏に属した中央ユーラシアの研究の分野において緊張緩和に貢献すべくPIACが創立され、当時西ドイツだったミュンヘンにおいて第一回会議を開いた。それ以来、毎年夏に開催されるPIACは、この分野では唯一の、東西の研究者が直接接触できる場となった。それからは主として、西ヨーロッパとアメリカ合衆国で開催されたが、トルコでも一回 (アンカラ、一九七三年)、イス

ラエルでも一回 (イエルサレム、一九八一年) 開催されている。一九六九年の第十二回会議は、初めて鉄のカーテンを越えて東ベルリンで開催され、以後、一九七一年の第十四回はハンガリーのセゲド、一九八六年の第二十九回は当時ソ連の一部だったウズベキスタンのタシケント、一九八八年の第三十一回は東ドイツのヴァイマルと、一九八九年のベルリンの壁崩壊までに、都合四回共産圏で開催された。東アジアでは、一九九二年の第三十五回会議が中華民国台湾の台北で開催されたことがあるだけである。今回の第三十八回会議の日本開催で、日本は二十番目の開催国になった。

今回の会議第一日の八月七日 (月) には、会場となった三菱信託銀行川崎研修所の玄関ホールで、午後一時から登録 (Registration) が始まり、参加者 (Participants) はそれぞれ四万円の参加費 (Registration fee) を納めて、名札と宿泊室の鍵を受け取った。参加費は、五泊六日の宿泊費・食費と、遠足の費用を含む。参加者はすべて五十二名、その内訳は次の通りである。日本人十四名、ロシア人十名 (カルムイク共和国二名、トウヴァ共和国一名を含む)、アメリカ人九名 (モンゴル系三名を含む)、ドイツ人五名 (ウズベク系一名を含む)、ハンガリー人四名 (フランス系一名を含む)、中国人二名 (ウイグル族一名、モン

ゴル族一名、韓国人一名、オランダ人一名、ブルガリア人一名、フィンランド人一名、フランス人一名(ハンガリー系)、モンゴル人一名、イタリア人一名、ベルギー人一名、計五十二名。その内、研究発表者は四十一名(内、二名は共同発表)、発表はせず参加のみが五名、同伴家族が六名であった。この他、故障のため参加を果たさず、論文のみ送付した者(台湾人)が一名あった。

八月七日の夕食では、受け入れ側の代表として、川崎研究所における研修プログラムの運営を担当する三菱信託銀行の子会社(株)アップル・プランニングの関谷迪弘社長の歓迎の挨拶があった。夕食後は、地階のサロン、及び宿泊棟の五・六階の談話室で、ビールとウイスキーを酌み交わしつつ、夜が更けるまで歓談した。これは毎夜の恒例となった。

第二日の八月八日(火)の朝には、午前九時から一階大研修室において開会式(Opening ceremony)があり、岡田英弘会長が、日本開催の実現までの経緯を回顧した後、開会を宣した。続いて十時から呼び物のコンフェッションズ(Confessions)があり、参加者一回、自己紹介と最近の業績を語った。

午後は研究発表(Paper reading)となり、一階大研修室と二階中研修室に分かれて二部会で行った。発表の題

名は次の通りである。

A 部会(二階中研修室)

第一セッション「言語」 司会 György Hazai

Soltsev, Vadim M., & Soltseva, Nina V., "The problem of the ties of the Japanese with Austronesian and Austroasiatic languages as an aspect of the Altaic problem." 「日本語とオーストロネシア諸語・オーストロアジア諸語との関係——アルタイ語族問題の一環として」

Alpatov, Vladimir M., "The problem of the choice of alphabets for the Turkic languages: History and present" 「トルコ諸語のアルファベット選択の問題——歴史と現在」

Anayban, Zoya V., "The contemporary ethno-linguistic situation in Tuva" 「トゥヴァにおける民族言語の現況」

第二セッション「言語」 司会 Vadim Soltsev

Hazai, György, "Some problems of the Old-Anatolian Turkish language" 「古代アナトリア・トルコ語の諸問題」

Higuchi, Koichi 樋口康一, "Uker-ün ayula, or Mongolian

version of the Gošriŋa-vyākaraṇa” 「『牛角發記經』の蒙文本」

Rozycki, William, “Mongol kiliyasun ‘horse hair’ -

Manchu inggaha ‘down, fuzz” 「ヤンチン語 kiliyasun

(鬃の毛) と滿洲語 inggaha (鬃の綿毛)」

Saito, Yoshio 斎藤純男 “Stress and vowel reduction in

West Middle Mongolian: The case in the language of

Mugaddimat al-Adab” 「西方中期ヤンチン語における

強勢と母音弱化——『ムガディマトール・アル・アダブ』

の言語の例」

□部会 (一階大研修室)

第一ヤミンモン「歴史と文化」 司会 Peter Zieme

Sinor, Denis, “The mystery of containers” 「容器の不説

義」

Birtalan, Ágnes, “A Tuvinian shaman family in Western

Mongolia: Heritage and assimilation” 「ヤンチン西

部のトットゥア人巫女の一家——伝統と同化」

Honey, David, “The text of Ssu-na Ch’ien’s Hsiung-mu

Logos” 「『史記』「匈奴列伝』の本文」

Kellner-Heinkele, Barbara, “St. Petersburg and the

steppe people: Diplomatic correspondences of the 18th

century from Moscow archives” 「サンクト・ペテルブ
ルグと草原の民——モスクワの公文書館に見る十八世紀
の外交信書」

Koyama, Koichiro 小山皓一郎 “Timur in the eyes of
the Ottomans” 「オスマン人から見たティムール」

第二ヤミンモン「歴史と文化」 司会 Barbara

Kellner-Heinkele

Meserve, Ruth I, “From awls to whips: The surgical

instruments of the animal doctor in Central Eurasia”

「錐から鞭まで——中央ユーラシアの獣医の外科用具」

Tongerloo, Alois van, “Saviour and healer in the Old

Uighur Manichaean and Buddhist documents” 「古代

ウイグル語の二教典・仏典に見る救世主と治療者」

Zieme, Peter, “Old Turkish versions of *The Scripture on*

the Ten Kings” 「『十王經』の古代トルコ語本」

Boikova, Elena, “Scientific and artistic heritage of P.

Plasetskyj” 「ユアヤンキーの学問的・芸術的遺産」

Boyaev, Basan E., “Atuka-khan in Russian and Kamy-

kian historiography” 「ロシアとカメルンクの歴史記録

に見るアユーカー・ハン」

その日の夕食は、研修所心尽くしのすき焼きパーティーと
なり、大盛りの牛肉とてんぷらと灘の銘酒に一同歡を尽く

した。

第三日の八月九日(水)にも、終日二部会に分かれて研究発表があった。

A 部会 (一階大研修室)

第三セッション「言語」 司会 清瀬義三郎

de Boer, Elisabeth, "Vowel harmony in Evenki" 「ハニ
ホンキ語の母音調和」

Corelova, Liliya, "Manchu as compared with the other
Manchu-Tungus languages within the paradigm of
Syntheticism-Analytism" 「滿洲語と他のトマンゴース語
との比較——総合主義・分析主義の範例に則して」

Janhunen, Juhä, "Are Mongolic and Tungusic related?"
「モンゴル諸語とアマンゴース諸語は関係か」

第四セッション「言語」 司会 石塚晴通

Kiyose, Gisaburo N. 清瀬義三郎 "The post-velar q , γ
and x in Jurchen and Manchu" 「女直語と滿洲語における
後部軟口齶音」

Vietze, Hans-Peter, "Manchu script on computer" 「滿洲
文字の電算化」

Choi, Han-Woo 崔漢宇 "Notes on some Altaic animal
names" 「アルタイ諸語の動物名」

第五セッション「言語」 司会 Hans-Peter Vietze

Barat, Kahar, "The Sino-Turkic transcription system"
「漢字のアルコ語転写体系」

Ernakova, Lyudmila M., "Seeing and naming things in
the early Japanese literature" 「古代日本文学における
物の見方と名づけ方」

Ishizuka, Harumichi 石塚晴通 "Japanese and Korean
devices for reading Chinese texts (2)" 「日本語と韓国語
における漢文訓読法 (2)」

Itabashi, Yoshizo 板橋義三 "Are the Old Japanese
personal pronouns genetically related to those of
Altaic?" 「古代日本語の代名詞はアルタイ諸語の代名詞
と関係か」

B 部会 (二階研修室)

第三セッション「歴史と文化」 司会 Sechin Jag-
chid

Fedorov, Alexander, "Chinggis-khan as a shaman" 「巫
やぶのチンギス・ハン」

Goutchinova, Elsa-Bair, "Business elite in Kalmykia:
New models of life" 「カルメットのコムキンス・ヒリーン
——新しい生活のモデル」

第四セッション「歴史と文化」 司会 岡田英弘

Ikeuchi, Isao 池内功 “The religious service of the Yuan Dynasty” 「元朝の宮廷祭祀」

Jagchid, Sechin, “The factors for Inner Mongolian disturbance: Response to the changing policy of the Manchu Qing toward Mongolia” 「内蒙古の乱の原因——清朝の蒙古政策の変化に対抗して」

Miyawaki, Junko 宮脇淳子 “Oyrrad family trees discovered in Kazan” 「カザンで発見されたオイラー系」

第五セッション「歴史と文化」 司会 David Honey Okada, Hidehiro 岡田英弘 “The imperial seal in the Mongol and Chinese traditions” 「モンゴルと中国の伝国璽」

Sätközi, Alice, “Rope: Symbolical values in Mongolian shamanism” 「繩——モンゴルのシャーマニズムにおける象徴的価値」

Shimo, Hirotschi 志茂碩敏 “The political structure of the Mongol Empire: Historical study of nomadic states reconsidered” 「モンゴル帝国の政治構造——游牧国家史研究の再検討」

Shimo, Satoko 志茂智子 “Rashid al-Din’s Mongol His-

tory: How it is related to Jami’ al-Tawarikh” 「ラシード・ウッディーンの『モンゴル史』——その『集史』との関係」

Shiraiwa, Kazuhiko 白井一彦 “On the ötügtü boyod in the Chingisid dynasties in Mongolia, China and Persia in the 13th-14th centuries” 「十三・十四世紀のモンゴル・中国・ペルシアにおけるチンギス家王朝のオトグ・ボゴルたち」

この日は研究発表を午後三時半で終わり、以後を自由時間とした。この間、別室で、来訪した東方学会代表らと、ハザイらハンガリー側が、一九九七年ブダペシュトで開催が予定されている国際アジア・北アフリカ研究会議（ICANAS）について会談した。

午後六時から研修所の食堂で、岡田会長が主人役となつて懇親会（Reception）が催された。これには学会の参加者のみならず、この学会の経費を寄付した一般の篤志家たちが来賓として来場し、さらに余興として源吾朗の大道芸「蝦蟇の油売り」と中丸春美の琴演奏があり、八時まで歓を尽くした後、地下のサロンで二次会を開いて大いに盛り上がった。

第四日の八月十日（木）は遠足（Excursion）に当てられた。午前九時、二台の大型バスで川崎研修所を出発、東

名高速度路を御殿場で下りて、仙石原を経て桃源台に到り、ここで海賊船に乗り換えて芦ノ湖を渡りながら、船上、持参のサンドイッチで昼食を取り、箱根町に上陸して関所跡と資料館を見学した。あいにくのもやで富士山は見えなかったが、湖面を吹き渡る涼風を満喫した後、午後二時、再びバスで箱根町を出発。途中、湘南海岸の風光を賞しながら、五時半、横浜中華街に到着した。しばし中華街を散策の後、六時からホリデイ・イン横浜一階の重慶飯店新館で中華料理の宴会となった。八時に宴を終え、バス内でカラオケを楽しみながら研修所に帰り着いた。

第五日の八月十一日(金)は、午前九時から総会(Business Meeting)を開き、岡田会長が、今年度のインディアナ大学アルタイ学賞、いわゆる PIAC Gold Medal が Jean Richard に授与されることを発表した。続いて来年度の同賞選考委員の選挙を行い、過去三回以上出席の委員の投票によつて、岡田英弘、Barbara Kellner、Heinkele、Giovanni Stary の三人を選出した。岡田会長の指名により、Giovanni Stary が登壇、今回の会議の紀要(Proceedings)は Aetas Manjurica 誌の特別号として、Otto Harrassowitz 書店から刊行されることを発表した。最後に Sinor 書記長が、第三十九回の会議は、一九九六年七月十五日からハンガリーの Szeged で開催するこ

と、会長は Arpad Berta であることを発表した。(会期は後に六月十六日から二十一日に変わった。)

午前中の残りの時間は研究発表に当てた。

A 部会 (一階大研修室)

第六セッション「歴史と文化」 司会 Ruth Meser-ve

Pang, Tatiana A., "The trip of N. N. Krotkov to the Sibe Buddhist monastery in 1899" 「一八九九年のクロトコフのシム仏寺訪問」

Stary, Giovanni, "A preliminary note on Kang-hsi's Manchu letters to his grandmother" 「康熙帝が祖母に宛つけた満文書簡についての子報」

Sechenmönkh 斯欽臣和 "Historical origin of woodcut Geser (Beijing) and Nomchi Hadon nu Geser" 「北京木版本『ゲセル・ハーン』とノムチ・ハトン本『ゲセル・ハーン』の年代」

最後に Erling von Mende が、怪我のため出席を果たせなかった Wu Shu-hui (吳淑惠) に代わつて、その論文 "How did the Qing army enter Tibet in 1728 after the Tibetan Civil War?" 「チベット内乱の後、雍正六年、清軍はいかにしてチベットに進入したか」を紹介した。

これで全研究発表を終わり、残りの時間を利用して、先に映写機の不調のため紹介できなかったスライドを、新しい映写機を使ってまとめて上映した。こうして昼食後は自由時間となり、参加者一同、三々五々街に出かけて楽しんだ。午後五時半から最後の行事として閉会式 (Closing Ceremony) があり、岡田会長が一同の協力を謝して閉会を宣した。この日の夕食後は、ふんだんに残った酒類を酌み交わし、最後まで和気藹々と楽しんだ。

最終日となった八月十二日 (土) は、朝食を共にした後、一同別れを惜しみつつ川崎研修所を出発した。

なお会期中、研修所のロビーには、小石四郎元氏の描くところのモンゴル風景画十三点が展示された。小石氏は建築家であるが、かつて内務省から内蒙古に出向し、現地召集を受けて駐蒙軍に入隊した。すでに八十歳の高齢であるが、心に残る内蒙古の風光をアクリル画に描き続けている。小石氏自身は不慮の事故のため来場できなかったが、この展示は好評で、多くの参加者がその印象を記して小石氏に贈った。

今回の P I A C の日本招待は、岡田英弘の宿志が十年ぶりに実現したものである。岡田は、ボン大学留学中の一九六四年、オランダのピーテルスベルフで開かれた第七回会議に初めて参加した。当時の P I A C はまだ創立当初の面

影を残し、プログラムはコンフェッションズが主で、研究発表は添え物の観があった。二回目に岡田が参加したのは、一九七七年にオランダのレイデンで開催された第二十回である。その後しばらく遠ざかっていたが、一九八四年、当時の西ドイツのヴァルバーベルク (ボン近郊) 開催の第二十七回会議から毎年参加し始め、翌一九八五年のイタリア・ヴェネツィア開催の第二十八回会議からは宮脇淳子を伴って参加している。このころから岡田は P I A C の日本招待を念願とするようになり、一九八六年のタシケント開催の第二十九回会議の際に、サイナー書記長に申し入れて大いに喜ばれた。

その後、岡田と宮脇は一九八七年の第三十回会議 (アメリカ・インディアナ州ブルーミントン)、一九八八年の第三十一回会議 (東ドイツ・ヴァイマル)、一九八九年の第三十二回会議 (ノルウェー・オスロ)、一九九〇年の第三十三回会議 (ハンガリー・ブダペシュト)、一九九一年の第三十四回会議 (統一ドイツ・ベルリン)、一九九二年の第三十五回会議 (中華民国台湾・台北) と、毎年欠かさず参加した。一九九三年の第三十六回会議 (カザフスタン・アルマトウイ) には、岡田が東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授を定年退官した直後であったため参加できなかったが、一九九四年六月にフランスのシャンティイ

で開かれた第三十七回会議には再び参加して、翌年の日本開催を公式に宣言するところまでこぎつけた。

岡田が今回の国際アルタイ学会の日本開催を実現できたのには、故新井俊三氏の助力に負うところが多い。新井俊三氏は銀行家で、三菱信託銀行の横浜支店長として敏腕を振るい、常務取締役のとき退職して経営コンサルタントを開業、一橋大学の先輩の故大平正芳氏が自民党幹事長時代に、その依頼を受けて新井経済研究所を設立、日本最初の朝食会形式の勉強会を始めた。これは後にシンクタンク(株)国際関係基礎研究所に発展した。岡田は一九七六年十二月に入会した(財)日本文化会議において新井氏の知遇を受け、一九七九年六月から東京千代田区大手町のパレス・ホテルを会場として、財界人を主たる会員とする朝食会「日本文化会議カルチャー・セミナー」を月一回開くこととなったが、この会では毎回、新井氏が総合司会として最近の世界情勢・経済情勢を解説し、岡田が進行役として講師の紹介、質疑応答の司会を務めるのが常であった。

岡田が国際アルタイ学会の日本招待の希望を新井氏に打ち明けて相談した時、新井氏は大いに賛同して、古巣の三菱信託銀行が百億円を費やして神奈川県川崎に建設した豪華な研修所が、社内の研修だけを細々と続けているのかもしれないといい、これが会場として利用できるように斡

旋してくれた。しかし当初、三菱信託銀行は部外者の利用に慎重で、地元のホテル業界との約束を盾に取って、学会参加者の研修所宿泊に難色を示した。ところが新井氏が一九九四年十月十八日に八十歳で逝去すると、銀行は態度を変えて宿泊を歓迎するようになり、一九九五年五月十五日には岡田・宮脇が東京丸の内の本社に志立託爾会長(当時、現相談役)を訪問して、正式に川崎研修所の利用許可を得るところまで行った。その間、銀行の子会社で川崎研修所における研修プログラムの運営を担当する(株)アップル・プランニングの関谷迪弘社長、岡本茂一常務、門山栄作企画部長、及び研修所の鶴見桂三所長は、学会の開催に積極的に援助の手を差し伸べた。今回の学会の大成功は、何よりも先ず新井俊三氏の遺志と、三菱信託銀行とアップル・プランニングの協力を負うものである。

今回の国際アルタイ学会が、岡田会長の個人主催で、學術団体の後援も公的資金の援助も全く無く、しかも開催の準備に当たったのが岡田と宮脇の二人だけであったにも拘らず、一つの手落ちもなく日程を消化し、参加者一同から、これまでの会議の中で最も成功した、真にP I A Cらしい会議の一つであったと絶賛されたことはまことに喜ばしく、これによって日本のアルタイ学が、初めて世界のアルタイ学界にその存在を示したと言つてよろしかろう。